

## 8 富士市のかぐや姫

### ふるさとの民話 ～富士市のかぐや姫伝説～

むかしむかし、その昔、京ができる前のお話です。駿河の国、富士郡に姫名郷（現在の富士市比奈）と呼ばれる里がありました。この里は、富士山を真正面に仰ぐふもとにあって、村人たちは朝な夕なにきれいな富士の山を仰ぎ、南に広がる青い海や伊豆の山々を眺めて暮らしていました。

この姫名の里に子どものいない老夫婦、翁と姥が住んでいました。翁は裏山の竹を取って暮らしていたので、「竹採の翁」とか「作竹の翁」、また近くに秋深くなって出てくる竹が生えていることから「寒竹の翁」とも呼ばれていました。

そんな翁と姥は、子どもを授けてほしいと祈りながら暮らしていました。

ある日のこと、翁が裏山へ竹を取りに行くと、1本の竹の根元が光っているではありませんか。

「不思議なことがあるもんだ」

と思いながら竹を切ると、竹の中に1寸（約3センチメートル）ほどの女の子がいました。

「子どもがいない私たちに、神さまが授けてくれた」

と、喜んだ翁は急いで家に帰り、姥とともに大切に育てました。

女の子はかわいく、美しい娘に成長しました。村人たちは、光り輝くような美しい女の子を「かぐや姫」と呼びました。

美しい娘が姫名の里にいるといううわさは、国司の耳にも届き、国司も使いを出して結婚を申し込みました。しかし、かぐや姫は国司の求めを断りました。

あきらめきれない国司は、自らこの姫名の里にやってきて、熱心に求婚したのです。国司の真剣な愛を受けたかぐや姫は、国司と一緒に暮らすことにしました。

楽しい数年を過ごしたある日、かぐや姫は突然国司に、

「今まで暮らしてきましたが、私は富士山の仙女です。富士山に戻らなければなりません。心残りですが、おいとましなければなりません」

しかし、願いは許されませんでした。かぐや姫は深く悩み、ある日突然、1つの箱を残して去ってしまいました。姫は育ててくれた翁や姥、楽しく暮らした国司との別れがたく、何度も何度も振り返りながら富士山へ登っていったのです。

姫との突然の別れに国司は悲しみ、姫の後を追って行きました。

富士の山頂には大きな池があり、その奥には美しい宮殿がありました。国司は宮殿に向かって

「姫よ。かぐや姫よ」

と名を呼びました。すると、かぐや姫があらわれました。姫と再会した国司は、姫を見て驚きました。

姫の姿はもはや人間ではなく、天女の姿で、姫のそれまでの容顔とは異なっていたのです。

国司は悲しみのあまり、姫の残した箱を抱えて、池に身を投げてしまいました。